

言語活動のパフォーマンス評価（ライティング編）

今井裕之（関西大学） himai@kansai-u.ac.jp

パフォーマンス評価のハードルは高い？

実際の言語使用に近い4技能、特にスピーキングやライティングを日頃の授業にどの程度取り入れているかが分水路になるように思います。知識確認的穴埋め、暗記暗唱、モデルの模倣に近い作文（感情のこもらない棒読みの）ではなく、自分の感情や考えを表現する体験が授業で日常化していればパフォーマンス評価の準備は完了だと思います。

デモンストレーション1

問) 以下の問いに、to不定詞を用いて(form)自分の本当の気持ちや考え(meaning)を表現せよ。

問1) What things do your teachers want you to do?

問2) What things do you want your teachers to do?

1への応答) They want me to speak up in class.

Larsen-Freeman(2007)に基づく

教師として、どのように応じますか？

教師1: That's good. Thank you. Next.

教師2: I see. So, you don't raise your hand in class?

教師3:

「場面(when)」「宛先(to whom)」の提示で表現の場作りをします。さらに「目的(GoalもしくはWhy)」が加わるとForm-Meaning-Use(使用の目的、状況)が揃い、言語活動にリアリティが出て棒読みが減り、「タスク」に発展させることができるのではと思います。

言語活動とパフォーマンステスト

三藤・西岡(2010)は、パフォーマンス評価の成立には以下の3点が重要だと述べています。

- 学校が保障すべき学力には、知識・技能を暗記・再生する力だけでなく、文脈において知識・技能を活用する力が含まれているという目標観
- パフォーマンス評価の方法を用いる必要性
- 評価規準としてルーブリック(評価指標)を使用すること

上記の要件を踏まえて、パフォーマンステストを考えてみます。

尊敬するひとを紹介しよう

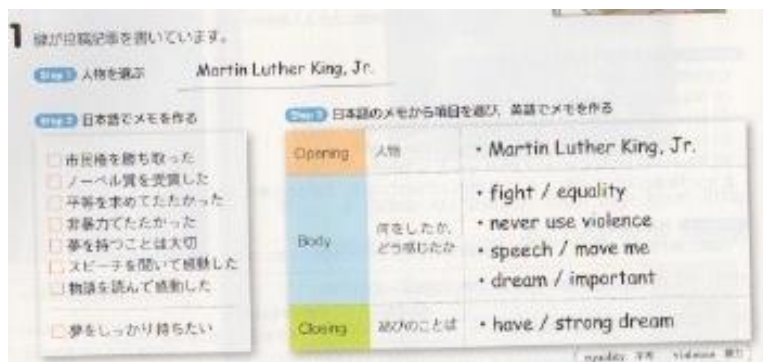
テキスト/トピック	タスク	コンディション	クオリティ
尊敬する人の特徴や尊敬するところ、その人への自分の気持ちを	Opening(誰を尊敬するか) Body(そんな人か、その人を尊敬する理由) & Closing(その人への気持ち)の3部構成の文章で説明、紹介する	語彙や表現については辞書で調べたり、教師の支援を受けながら	インデント等の書記ルールを守った英文で

デモンストレーション2：評価課題と実施手順（New Crown 3 Use Write を使って）

ジャンルベースドライティング

1. 作品の鑑賞と分析
2. Joint construction（教師がリードしながら共同制作）
3. 個人による作成
4. 読み合い
5. ルーブリックを用いた評価

1 作成過程の分析



日本語メモ＝リストアップ 英語メモ＝選択、配列、キーワード

作品の構成を確認します。3部構成の切れ目を確認し、body での流れが一般的 > 個人的見解になっていることなどを導きます。

2 Joint construction（共同制作）

教員のリードのもと、ひとつの作成を協働で作成します。教員は、誰について書くか、その人についてどんなことを知っているかを生徒から引き出し、構成を決める手順や英語で書く過程を生徒に示します。生徒を過程に参加させながら、書くプロセス、プロダクト（モデル）、評価のポイント（ルーブリック）を共有することが大切です。

3 個別のライティング「私の尊敬する人」

Opening

○○○○

Body

○○○○

Closing

○○○○

4 フィードバック（読み合い、ルーブリック評価）

フィードバックでは、ルーブリックを用いた教師による評価、相互評価などを行います。ライティングでは、学習者が書いた内容への反応や、書ききれなかったことへの言及も大切なフィードバックですので、生徒同士で読み合い、コメントし合う時間をとってください。スピーキングの場合は、評価言や褒め言葉だけではなく、生徒の発言を教師の言葉も重ねて言い換える、質問をして話題を広げるなどしてください。

パフォーマンス評価の意義

三藤・西岡(2010)は「パフォーマンス課題を設定して授業を計画するようになってからは、教科書を暗記させないと力をつかないという呪縛から解き放たれた」と述べています。パフォーマンス評価＝パフォーマンス授業です。パフォーマンス評価課題を授業活動に組み込んで授業計画を立て、ルーブリックで評価可能な言語活動をデザインすることで、定期試験以外でも **writing** の評価を行えるような授業が良いと思います。

次期学習指導要領との関連

次期学習指導要領では、評価の観点を「言語や文化についての知識」「表現、理解の能力」「コミュニケーションへの関心意欲態度」から「**知識・技能**」「**思考力・判断力・表現力**」「**学びに向かう力・人間性**」へと変更するようです。外国語科にこの観点を当てはめると、「知識・技能」は、従前の「表現・理解の能力」をある程度取り込み、英語の音声、語彙、文法の知識を単独で指導・評価するのではなく、それらを「コミュニケーションの場において活用できる技能」として指導し評価することになります。「思考・判断・表現力」は、言語を使う目的、場面、状況などを設定した言語活動（タスク、プロジェクト、スピーチや即興会話）など、言語使用の内容面も含む「活用型学習」の指導と評価が不可欠となります。

正確に英文を理解(**comprehension**)し、再生(**reproduction**)する技能と知識だけではなく、生徒たちのことばに「思考と感情」が培う指導と評価の方法がまだ十分ではないように思います。

筆記試験でのコミュニケーション力の測定には限界があります。言語活動の推進により必要性が高まった「パフォーマンス評価」を、外国語科で取り入れる意義は高く、高いだけに、それを外部評価に任せてしまうわけにはいきません。

参考文献

- 今井裕之・吉田達弘(2007)『HOPE 中高生のための英語スピーキングテスト』東京：教育出版
三藤あさみ・西岡加名恵(2010)『パフォーマンス評価にどう取り組むかー中学校社会科のカリキュラムと授業づくりー』株式会社日本標準